

自然エネルギーのライフスタイル&ビジネス誌

# SOLAR

JOURNAL

フリーマガジン

13  
2015 SPRING  
TAKE  
FREE

特集

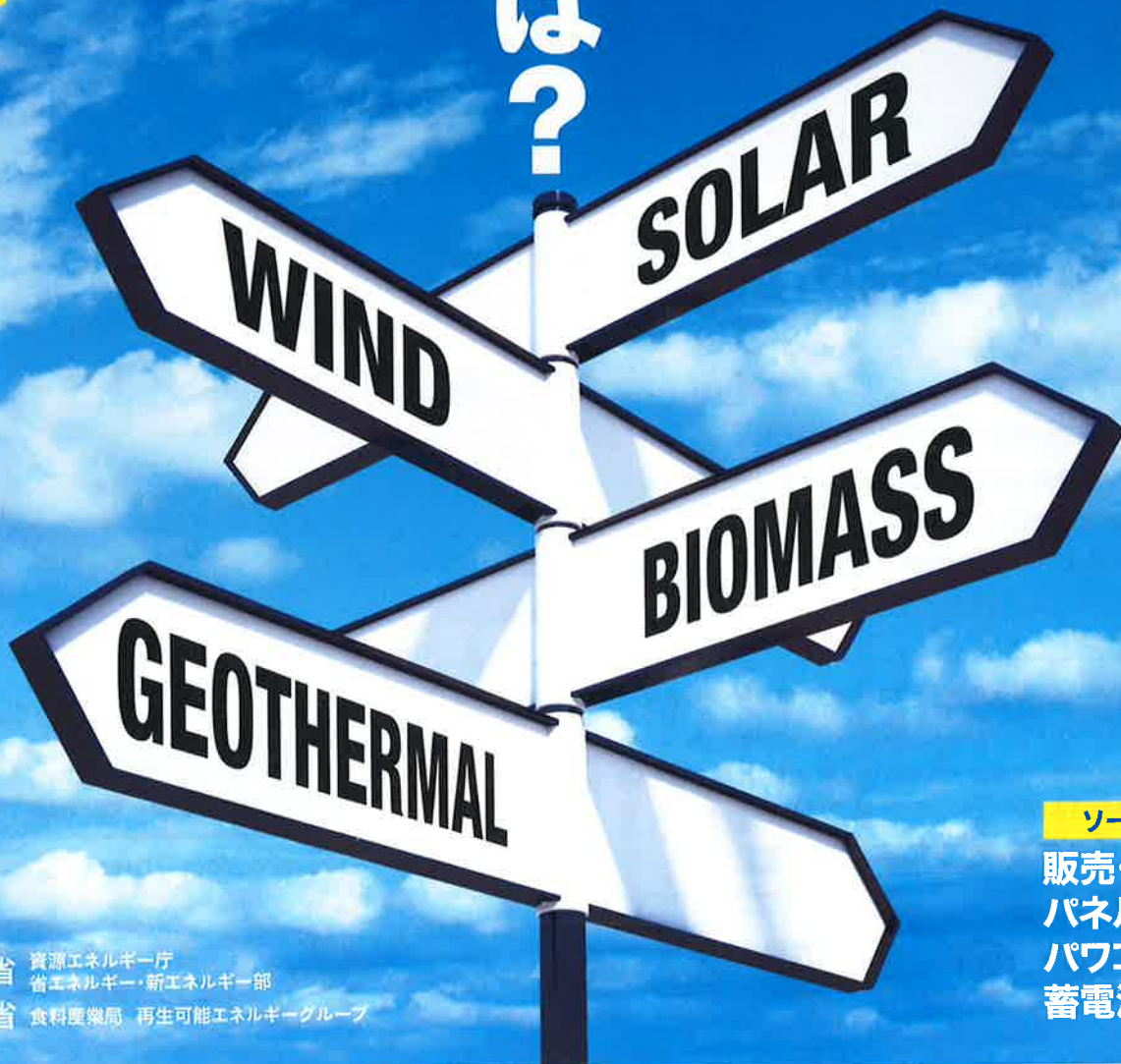
地域活性に  
つながる  
自然エネルギー

太陽光  
風力  
バイオマス  
地熱

次に来る  
再エネ  
は？

再エネ業界の  
エキスパート  
日本の未来を予測!

SOLAR CELEBRITY  
ポール・マッカートニー




取材協力  
経済産業省 資源エネルギー庁 省エネルギー・新エネルギー部  
農林水産省 食料産業局 再生可能エネルギーグループ

ソーラーINDEX

販売・施工店  
パネルメーカー  
パワコンメーカー  
蓄電池メーカー





みんなで作る  
野菜と  
エネルギー!

# ソーラー シェアリングで 地産地消

市民と電気の子カラで農地が美しくなる!

野菜と同じく、エネルギーも地産地消が求められる時代。そのカギを握るのは「市民の力」だ。震災以降、地域でつくる地域のための電気「ご当地エネルギー」が徐々に増えている。なかでも農地と発電を組み合わせた「ソーラーシェアリング」がこれからの農業の在り方を変えようとしている。

写真/高橋真樹、東光宏、いすみ自然エネルギー、えこえね南相馬

農地の上に太陽光パネルを並べて発電する「ソーラーシェアリング」は、土地を有効利用して、農家が農作物だけでなく売電という副収入も得られる方法として広まってきた。法律が改正され農地で施工しやすくなった2013年からは本格的に増加、現在は100ヶ所程で実践されている。一般にメガソーラーなど大規模な太陽光発電所を設置しても、収



2 1  
4 3



1.2013年9月からソーラーシェアリングの実証実験が始まった。作物は菜種やブルーベリーを栽培している。(提供：えこえね南相馬) 2.えこえね南相馬の理事長・高橋壮平さん。プロジェクトを立ち上げた父親で医師の亨平さんが2013年に亡くなってから後を継いで活動をしている。 3.えこえね南相馬の専務理事・箱崎亮三さん。震災前は林業を経営していた。 4.ソーラーシェアリングを実施している所から数キロ離れた同市内の小高地区では、放射能の線量が高く、2015年現在も人が入れないまだ。



## CASE II 南相馬

# 農地を農地として残すためのエネルギー利用

益は設置企業のものになるので、地域へのメリットはあまりない場合が多い。一方、このソーラーシェアリングは設備こそ小規模だが、農家が売電収入を得ることで地域の農業が持続可能になり、農地が農地として守られるという意義に結びつく。

よく知られるように現在日本の農業は、農家の後継ぎ不足や農業従事者の高齢化、そして耕作放棄地の増加など数々の問題を抱えている。しかし、売電収入を加えれば営農していけるとわかれば、再び農業を手がけようという人も増加するはずだ。

新しいアイデアによってその可能性はさらに広がる。例えば、福島県南相馬市でソーラーシェアリングを実施している一般社団法人えこえね南相馬研究機構(えこえね南相馬)というグループがある。ここでは放射能の影響ですぐには食用の作物を作れないが、発電を行うことで、収入を得ながら土の除染や農地としての確保をめざしている。

いずれにしても、「まずは売電収入ありき」という発想ではなく、農業や農地を活性化するために、どのようにエネルギーを活かせるのかという視点が重要になってくるのだろう。





2 1  
4 3

1.ソーラーシェアリング経験者の高澤真さん。 2.作物の栽培と太陽光発電を同時に行う(提供:東光宏) 3.千葉県いすみ市で実施された設置作業に集まったボランティア(2015年2月21日) 4.ブルーベリー畑の上に手作り720枚のパネルを設置した(提供:いすみ自然エネルギー)

## CASE 2 市原



# パネルがあることで日射が抑えられ、収穫量が増えています

農地の上に設営するため、当初は植物の光を遮ることが農業へ悪影響を与えるのではという疑念の声もあった。しかし、作物によっては太陽の光や熱が強すぎると成長が止まる作物がある。そのような場合は、むしろパネルである程度の太陽光をカットすることで、かえって成長が早くなるという。

千葉県市原市の農地で2013年からソーラーシェアリングを実施している高澤真さんは、2年間の経験から、収穫量が落ちることはなかったと胸を張る。

「トマト、キュウリ、白菜、キャベツなどあらゆる作物がよく収穫できています。さらに里芋などは、通常は水やりしても太陽熱で蒸散してしまうのですが、パネルがあることで日射が抑えられ、設置前より収穫量が増えています」(高澤氏)。さらに、これまでは真夏の強い日差しを浴びながらの農業は大変だったが、パネルが日よけになって楽になったという嬉しい効果もあったという。

ソーラーシェアリングの設置には、特殊な資格が不要で、農家や地域の人たちが参加しながら組み立てることができるというのも魅力のひとつだ。通常の太陽光発電に比べ、一つひとつの部材が小さいため手間がかかるという難点



# ご当地 エネルギー MAP

震災以降、ご当地電力は増え続けている。農家や新聞配達員、寿司チェーンのパートさん、居酒屋の店長、かまぼこ屋や酒蔵など、エネルギーに関わりがない人たちがリーダーとなり、運営しているケースもあるという。



『ご当地電力はじめました!』  
(岩波ジュニア新書)

文／高橋真樹  
全国をめぐり、地域が主体になった自然エネルギーのプロジェクト取材している。WEBサイト「高橋真樹の全国ご当地エネルギーレポート」で連載中。著書に『ご当地電力はじめました!』(岩波ジュニア新書)など。

はあるものの、農業従事者自身がエネルギーづくりを直接手がけることの意義は大きい。  
千葉県でソーラーシェアリングを広めている「自然エネルギーちば」では、Facebookなどでボランティアを募りながら、組み立て作業をコーディネートしている。  
今後の農業を何とかしようという農家と、こうして実績を重ねているコミュニティが力を合わせることで、新しい農業のあり方が広がって行くのではないだろうか。